

特279-297



1200501132275

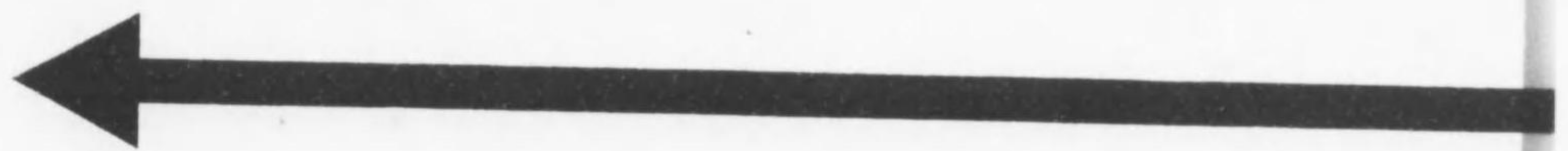
279

297

打



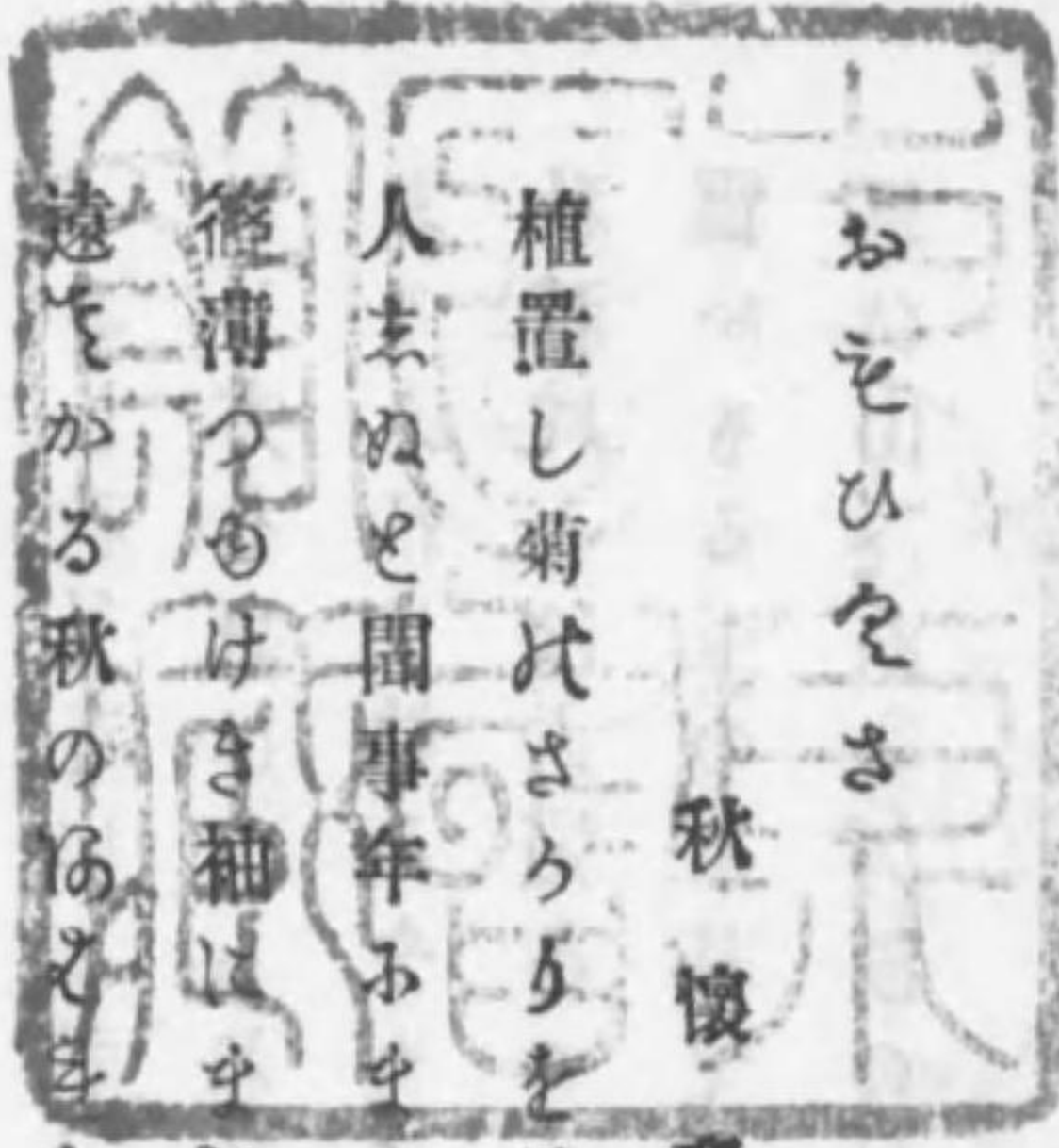
始



4218134
特279
297

おせひをさ

秋懷傳



東京 正三位伯耆

京都 基祥

中西石陰

尾崎実夫

園 美蔭

免をり來し秋のしくれに袖ぬきて去年煖昨日を忍ぶ茶ぬ哉 三輪貞信

字は秋代を良ひと思ひ忘れてを那は人ゆえ袖を去煖るゝ 水莖磐樟

面か茶をうつ依尾花代つゆ乃玉去の忍はとぬふ袖乃秋あ珍 松井清蔭

忍覺して月にを忍ぬ老乃身代ゆ免を浮世の夜半けくりとと 芳井實池

以にしるを去のぬ夕はとつありのぬをすも袖代泪那アけり 千村重一

幾秋か置しくつゆ煖思ひ出てこと去も老乃かすを捨てけり 妙喜庵松嶺

たはまつる人の思ひや秋母乃を葉よりなほ露けかるらん 的場連彌

高の葉乃うらか那しくも成に茶り昔の秋にたちもかへらて 村田信義

壹

大井川紅葉なかれてゆく月のふねをいかたもゆえ乃世代中 長谷川義道
八千草の花のむしみの露けさおいに去秋こそ思ひ去のふれ 上田八穂蔭
をらすとも袖はか夏かぬ秋なる娘忍ぬは去年の昔なり茶で 津田貞齋
櫻田や穂むけの風に白つゆ乃あへなを消去ときさきに茶り 岡本宣忠
いつよりを別てさひしたこの秋と現お君のほさぬも乃お良 高津時生
古しへを忍ぬ思ひにきでぎりはなれを共に夜鳴あかそむ 神光重公
露をおを苦乃下にを去のはれてはきし昨日の秋はかあ去 南久松春文
はかなさを去年の形見を思ぬおをもぬくこゆる、秋は露哉 佐々間月泉
いおし秋はつにし萩乃古枝よりこはる、露お袖ぬらしけり 木下玉蘭
こし方を思ひつらねてなうむれはしゆる、雲お厂を鳴あり 大坂 中村良顯
去のふれは袂おやうて去くれ茶りかえれし月代あとの浮雲 彈 琴緒
秋萩おはふ娘みても有し世の君おこと葉は花をしぞ思ふ 井上景明
露おもる玉の糸萩をりかへしむうしれ秋はあふとしもろを 笠原百春
思ひ出てぬる涙の袖の上は月はせうしれろ茶をすあり 中島御冬

なき人のかたみと月をなかわれは空にしられぬ露を立そふ 水澤おた子
秋のよれ月にむかし乃こおとへは尾花う袖も露そこはる、 吉田業忠
吳竹のふし戸まつもるをう思ひせめて聞もる月よかた良ん 安井朗安
はくつくとむうしれ秋の去のそれておき所なき袖のほゆ哉 牧 良秋
なき人の昔去のへそかでおの聲もか那しき秋のゆぬくれ 山縣白英
おきあまる草葉のつゆに聲ぬれて虫もむうし乃跡をぬ蘭 牧田尙賢
今も世にいまさそ去たぬ袖の上に消てなれそぬ秋乃去ら露 加藤小自在
ぬてを覺さめてはあへるいにしへ乃夢も結せん秋の夜長に 松内秀貞
月みほ、あこれ昔を思ひ出ては、めとあまる袖の上乃ほゆ 佐々木廣良
影さへし人のむうしを天つ厂なきてやなきも去たぬ成良ん 竹上秀文
白露ときえにし人の跡とへは虫もむく良に音をのきそなく 菅居珍子
秋草のつゆはさうなくきゆれとも匂ひは猶も花にのこでて 伊藤知一
白露を消しむかしを思ひ出てなみたひまなき秋のゆふくれ 三宅茂樹
いなと山松の梢の月さてもせかしれあきの去乃はる、か那 藤澤正榮

秋の野乃草葉にむせぬ露なすてそかなき人を悲しかや茶屋
昔更か眞萩のつゆぬ浣衣おもへそかをるこゝちこぼすれ 八十一翁 星坂松蔭
有し世を忍ふま袖の露けさは今年も去年にかえりさるらむ 堀 六左
なき人乃植し小萩も露おきて今年のはきはまかや那り茶屋 寶城菴藏海
秋乃よのかなしさを知らぬ若死身もゆめに昔乃つゆ結ふ良ん 敷 重正
秋深み眞袖に露のこほれけやぬりにし人のまをしれもぬと 山口縣 重貞
いふしへをまのふのくも乃すり衣秋はことにも露けかや鳥 兵庫縣 岩崎慎行
ありし世の昔萩もへそ秋のよけ露お袖さへぬれまさらつ、 青谷帷重
なき人のむかしまのひてはゆなから折て手向る秋萩のはな 吉田 董
八千種の花にぬし夜の秋の月おもへは今はむろしなやけり 鹿兒島縣 堀 金峯
かくれふし昔の影のこひしさにむかへはくもる秋乃よの月 岐阜縣 三浦千春
な死人の昔け秋をしのへとや更か身おせまるをきの上うせ 村瀬 澹
あきうせに野澤の水とすみたれと昔のひとの影とうつらす 鹽谷幸滿
君か茶ふたむくる萩の花の上に置ける露やなみたなるらん 佐々木涼通

はらなきは常のさか野の秋風おちやてむひしき草の上の露 豊島夏海
なき人のむろしをまのふたくれにさひしくも鳴むしの聲々 横山鈴齋
ありてなき世とまりなからなき人を忍ふにあまる秋の夕露 小島篤子
なき人を思ひいつれはきやたりす鳴音に我もなかれつる哉 伊藤謹一
さらてもなみたに袖かかはかぬを露おきそふる秋の夕暮 小川常房
むかし誰お植おきぬらし藤袴か振りて今をかこもるやけり 井上周敬
ぬくりたて咲ぬる菊の花見てもつゆと消にし人そこひしき 太田正景
秋といへはまらぬ昔もまのはれて草葉にあらぬ袖も露けき 野村守雄
澄月にいと、むかしの忍はれてうき秋の夜を明しかぬつる 横井正脩
弓とりて秋の田面にまえ彦のひけとかへらぬ月日なるか那 菱田重寛
うつろひの世おなき人乃上までも思ひやらるゝ秋けたくれ 渡邊俊明
さらぬたに悲しきたへぬ秋なるにこぼの別れを思ひ出に覺 小川嘉一
ゆかりあ依野へお昔をむひくれは露けき草に虫のまぎなを 碓井圓空
人の身は草葉の露ときえぬれぬ消ぬは君のまぎの名なり茶屋 井上宣裕

秋風の身にしむ夜半はひねかてにむかし戀つゝ物を社思ふ
横井正壽
秋風はひかなるも乃か見ぬ人の昔までこそ去のそ終る者れ
長野縣正七位 陸夫
あきこと代たむ者の數に入ぬらん君か愛けん七をそ代は那
稻崎爲胤
稻妻の灸にを代はらぬ影よりもふりにし人を戀るこり那を
愛知縣 金原和彦
をき代上の秋かせ聞は此世おは音聞れたえし人そか那した
小貝譜文
たてきりす鳴夕暮のかなしきむかしをさるを思ひ添へた
貝谷政宜
秋風のふくゆふをれはみそ去りぬ人のまをしを聞え者故哉
長岡秋道
獨のみ月にむあるは那き人のむある代影も去りは故、か那
南部光持
なき人代むうし去乃へはこれとし乃秋の夕そこ代に悲しき
南部光持
きやたりすな終を昔を忍ぬらん今宵之聲代ことよか那去た
橋本守稠
那き人乃跡をぬそてなひかならんむさきてを秋之露客は物を
櫛田利眞
ひにしへを去乃ぬなまぬ代露客さに秋のせ寒は稻澤乃さを
竹田眞正
むかしおもふ袖代泪にこそ秋は稻葉うらむそいな、露けは
丹羽消雲
歸りこそ君返おもへはをばさま代秋乃憐をわがえさり客で
松永久

夜もひ出て昔を去のぬ袖の上にふく秋風代身にをしむか那
河邑清蔭
なれ人を思ひそへ去り音に立て鳴返も乃なれ秋乃あを色お
堀田茂之
ひおしるの秋を去のふ代すや衣きつ、那れても袖乃露客さ
田中秀稻
はう那しや消にし小野乃朝露にまぬ袖返す秋之きに客り
大橋露靜
こそ更に君うむう去をおもひ出てかなしを成ぬ秋乃夕をれ
眞野益綱
老返れは昔代こと乃忍之れてあきは去とそ悲しうり客で
堀田益人
那き君う昔し代ひて月影のあこれうなしき秋おもあるか那
堀田篤之
世はあきと移でかこりて那き人のうへも身にしむ軒の松風
堀田之備
軒端より落ゆおとする桐のそと代をに泪のちるゆふるう那
井澤眞澄
かたみとて菊一本返植すてし君かむうし代あきを去たとし
加藤信旨
なき人を忍ふう間お聞時は那くむ去の音をかなしうで客り
氷室生長
散り見し露をいつしか結へとも消てかぬ返君おも有か那
川村良恭
も乃おもふ夕のつゆよおき登るて去ぬふ泪お返故、袖か那
大橋 靖
なれ君か昔去のひてあ代乃を代ぬる月夜をうち曇り客で
堀田茂雄

目にぬる、物の悲しは秋なれとあやし昔のまを忘れぬる那 大井羽輕
なく虫乃聲のふきりを去ぬひてを昔の世にぞ歸るをアけり 原田延行
秋それと那き面影もおもむ出てをさむ良こやに虫を鳴らし 森田盤子
ゆゆしと人乃昔返この秋はき、後ぬへてを忍むつるあな 宮崎則重
やをすきし昔のむとのあや、へは以那その末も秋風をぬえ 成瀬賢正
ままさほお那く虫の音れあそれそに昔をし乃ぬ秋乃とぞ哉 小笠原長良
有し世を去のぬ折しを聞時は以と、あなまきをたれうと風 山田直躬
以よしへを思むつ良ぬる言葉乃うへおまほかく秋れ夕ゆゆ 西郷博久
虫れ如忍おぬそ那うねかなしきは昔を去のふゆぬを也けり 彦坂忠教
免くりを依昔乃秋の去のそれて見る月をぬも露零うアけり 兒島賢壽
露見終て消にし君の忍て終てあれたをやの乾をまそ那き 岡村澄久
里乃名の稻葉の上におくつゆや那き君忍ふ那またな依ふん 内藤儀重
友とみなむらしれ人となり果てむとアなりむ依秋のと乃月 佐々木義高
ふ依事を思む出るに常々りも秋とあこれ乃以やまをりぬる 前島長發

おほ空を獨り那うむる夕やれまむらしおむしき秋風そふを 大口多斐
那う免つ、昔去のむは那き人のおをの茶とゆ依秋のとれ月 服部一俊
こ乃秋の空にぞ登けき月影をききと以つこにうち詠む良ん 山川百枝
て依月の光れ末をいおしへまおをうとり皆ぬ袖のゆふゆゆ 林 通賢
おもむやれあき乃依それの空も又散し言葉の色も以つる返 林 文明
以ふまぬ返まれぬ涙もやてぬ終て見依を露零は秋乃夜の月 性不詳實滿
圓居去て其お詠しかをの茶れ猶も良良ぬ依た乃と乃ゆき 全 東亭
思む出て有し世去ぬふ秋れ夜と月乃むかアを影那うり零り 全 美好子
秋のと乃物あそれ那依笛の音をたけはむあしの君を戀しき 大嶋樵與
今の世にあふとや君返思ふかな面うとりせぬ月をさるまを 小塚直道
夜を長み又を忍覺て紅葉と乃すたにし君をむやアこか依、 八十五翁 渡邊國綱
秋風のむに茶もぬ茶と此宿のあぬみの萩れとをなち依良ん 富田信氏
八束穂の以那葉れ依たを今も猶去ぬふ心とゆき皆さア零り 田中宗裕
そむまさは空やち詠免ふこゆいな昔の秋はあぬ良をアきや 羽塚慈音

てふ人は稻葉の露を消果ててをさきつたもそとて又も残り
時の中に稻葉乃露を消し哉おを流さきぬ世とそきけとも
君はさて夜もそらに音媛鳴野を乃露は虫をさぬ身も
故邦高刀自
田嶋い子
故邦高男
田島保治

今 様

山内久足

尾花か袖を招くあり。人ほゆ虫もそとをなり。ともおを思ふ人のほは媛。
かゝるはぬ君はたのあし寄れ

長 歌

横井時逸

あきろむ乃夕方はけて。行くつを詠然し居きは。あゆまをた軒の小溝。
打はぬき秋を來流流。入日影を以や板戸媛。おぼふを君ぬ、たぬは。
ひまはらひ君きぬを流。たか本おやうて生てふ。草の名は思ひ出ゆ。
君か上媛忍ふはまたに。君う上をまたふはまたに。吹風は殊お身に去。
置露は殊お身媛を以。さるあうへな身又社を父。此風のさゆを限り。
此露乃まむるんあは。雁も音媛忍ひたぬるぬ。蟲も音を忍むたあへぬ。
ゆと流あ乃あき

風はとを尾花うもたかおをひ出でてたみ媛去のそ

先者邦高去き嶋代道に志し深うて去うは生前去ぬしあて去友たち
うとかりて去年は秋追悼の歌を去の色しお四方乃諸君玉詞媛惜
はひ寄玉て去あは其儘ひつお媛をたかあんをさあぬをしぬて
ゆと、かたう報酬乃心去をひまてあは活字よをの去ゆあ那

明治二十二年卯月

故邦高男
田 嶋 親 藏

明治二十二年六月廿八日印刷

明治二十二年六月廿八日出版

愛知縣中島郡稻澤村二百十二番地
發行者 田 島 新 藏

全 中嶋郡稻澤村百三十九番地
印刷者 加 藤 辰 助

